

2016 キューバ友好フォーラム

6月25日(土) 13:30~16:30 開場 13:00

会場

日本記者クラブ大会議室

TEL 03-3503-2721

東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル9階

最寄り駅は東京メトロ千代田線・日比谷線霞ヶ関駅、東京メトロ丸ノ内線霞ヶ関駅、都営三田線内幸町駅、JR新橋駅日比谷口

シンポジウム

どうなる キューバ ★ ラテンアメリカ

10年以上にわたって左派政権が席卷してきたラテンアメリカの政治情勢が、このところ急展開しつつあります。キューバは、昨年7月、54年ぶりに米国と国交を回復、本年3月20日には、オバマ米大統領がキューバを訪れました。米大統領のキューバ訪問は88年ぶりのことです。

一方、昨年11月のアルゼンチン大統領選挙では、中道左派政権の与党候補が中道右派の候補に敗れ、同12月のベネズエラの総選挙では、反米左派の与党が野党連合に大敗しました。さらに、ブラジルの中道左派政権が、経済不振と汚職疑惑により深刻な政権危機に陥っています。

こうした急速なラテンアメリカの政治情勢の変化をどうみたらいいのか。変化の背景にあるものは何か。そして、これから先、ラテンアメリカはどうなるのか。この地域の実情に明るい方々をお招きしてシンポジウムを開きます。奮ってご参加ください。



シンポジスト



伊藤千尋さん

ジャーナリスト
元朝日新聞記者



小倉英敬さん

神奈川大学教授
国際関係論・ラテンアメリカ思想史専攻

もう1人の
シンポジストを
交渉中

どなたでも
参加できます♪
お友達を誘って
ご参加ください♪

参加費 1000円(会員 500円) ※事前申し込みは必要ありません

お問い合わせはFAXかe-mailで下記へ。

キューバ友好円卓会議 〒157-0073 東京都世田谷区砧 8-15-14-101

FAX 03-3415-9292 e-mail : cuba.entaku.0803@gmail.com

キューバの今を考える

講演録

ハイブリッド・キューバの歩き方 — その傾向と対策

白根 全 ラテン系写真家／カーニバル評論家

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。仕事（撮影取材調査海外観察記録編集企画制作など）、その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）、さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネーターも担当。これまでに訪れた国は6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来この夏で30回目の訪問をマークした。東京出身。青山学院大学卒。



司会・二瓶裕子（上）

岩垂弘円卓会議共同代表の挨拶（下）

誰も語らない、誰も観ていないキューバ

西半球でもっとも退廃した街だったハバナ

今夏30回目のキューバ訪問をマークしたが、最初は1989年でソ連崩壊前だった。以来、キューバでは路上観察と定点観測を続けてきたが、29回目までと30回目とは何がどう違うか。何も変わらないとも言えるが、それなりに変化し続けていることは間違いない。誰も語らない、誰も観ていないキューバを共有したい。

まずキューバの立ち位置。ラテンアメリカの国であることと、カリブ海の島であることが、二つの特質といえる。ラス・アメリカスという呼称があるが、キューバを特殊と捉えるか、いろいろある中の一つと捉えるかで見え方も違ってくる。

500年前コロンブスに「発見」されて以来、基本は砂糖をつくる島であり続けてきた。サトウキビ・モノカルチャーの中で独立し、アメリカに属国のように支配され、独裁者にさんざん虐げられてきた。

一枚の写真がある。アメリカの写真家ウォーカー・エヴァンスが撮影した、写真集「ハバナ 1933」の中の一枚。当時のキューバの悪のすべてを表す作品といわれる。西半球でもっとも退廃した街といわれ、ハバナへ行けば賭博や売春、麻薬など、すべての悪が楽しめることされていた。

1946年、晩秋のハバナの港に降り立った一人の男がいる。ラッキー・ルチアーノ。彼はシカゴ・マフィアのボスで、カジノや麻薬などの利権を手に入れ、バチスタら独裁者を陰で操っていた。

最後のカリスマ政治家フィデル

立ち上がったのが、正義感に燃えた青年弁護士フィデル・カストロだ。ハバナ大学法学部出身。1953年7月26日に武装蜂起し、1959年1月1日、革命政権を樹立。今のキューバが始まった。アメリカとキューバの2国間関係は、一言でいうと「フィデル・カストロ」のみに集約される。アメリカは彼の存在が許せない。フィデルの存在感もまたタダ事ではない。彼に匹敵するのは、ネルソン・マンデラの死後もう誰もいない。最後のカリスマ政治家だ。

彼の存在が気になった日本人が船戸与一氏。彼は安保・全共闘世代で、外浦吾朗というペンネームでは「ゴルゴ13」の原作者。豊浦志朗の名で、「叛アメリカ史 — 隔離区からの風の証言」を書いている。

グレートジャーニーでパナマ地峡の危険地帯踏破に取り組んでいたとき、メキシコのサパティスタの取材を済ませた船戸氏に、これからキューバに行くから来いと声をかけられた。ハードコアは見逃せない人で、彼の気になる存在がフィデルだった。

チェもタダ者ではない。バチスタ側将校の死刑執行命令書にサインをしたとき、将校の母親が延命を請うても、「今度は君たちが泣く番だ」と、顔色ひとつ変えずに言い放った。

チェはフィデルと出会う前、グアテマラで街角の写真屋をやっていた。本人も写真好きだが、それ以上に絵になる人。メキシコでフィデルと合流し、1956年11月、12人乗りのグランマ号に82人も乗り込んで上陸地点に到着。マングローブの沼地をフル装備で突破するが、バチスタ側

に待ち伏せされて壊滅状態になった。

トゥルキーノ山にたどり着いたのは12人。その中には、後の革命の立役者になる逸材が揃っていた。シエラマエストラの司令部を拠点に、勝利を勝ち取った。バチスタはドミニカに亡命、2年間に24万5000人が亡命した。

反カストロ亡命団体の拠点・マイアミ

ここで少しマイアミの話を。

反社会主義・反カストロのキューバ系亡命団体の拠点。アメリカ政界でのロビー活動で影響力あるグループだ。フロリダの選挙は、アメリカ大統領を決める影響力を持つ。キューバに甘い人は勝てないという。船戸氏の著書「国家と犯罪」(小学館刊)にこのルポが出てくる。

キューバン・アメリカン・ファンデーションは、武闘派ではなく反カストロ宣伝工作を行う団体。利権がすごい。キューバ人は商売上手で名だたる企業の経営者が多く、資金が流れこむ。キューバ潰しのために金をつぎ込む。嫌味でホセ・マルティの名を冠した対キューバ謀略放送を、延々と続けている。

ハードコアの武闘派団体もあり、そのリーダーがアルファ66という反カストログループのホルヘ・マスカノッサだ。キャンプで武闘訓練をするコマンドの中心は、革命後マイアミに亡命したブルジョアの子弟たち。リクルートによってニカラグア、エルサルバドルの社会主義政権から逃げ出した者たちも参加している。南米軍事政権が潰れた後、中東やアフガニスタンで傭兵として活動した者もいる。彼らは高速艇でキューバに侵入、マシンガンをぶっ放して帰るといったテロ行為をしている。かつてキューバ領空内で、反カストロ武闘派の小型機が撃墜される事件が起きた。この時期、米国内でキューバへのテロ対策情報活動をしていたのが「5人の英雄」だ。

グァンタナモ基地は、現在でも冷戦構造そのままの最前線だ。この海軍基地はアメリカが租借したまま、アメリカの国内法も及ばない時代錯誤の象徴。両国の合意に基づいて返還とされているが、簡単には手放さずハードルは高いだろう。

基地周辺の国境地帯は、カンボジアを抜いて世界一の地雷敷設地帯だ。この地域の地形は、アフリカのサバンナによく似ている。キューバがアフリカに派兵して実戦体験を積んでいたのは、「実は……」ということかも知れない。

「ガソリンはいらぬ、健康にも良いし、公害も無い」

話は変わって、キューバ国内での大きな転機はいくつかあった。

最大の転機は1991年12月のソ連崩壊で、突然見捨てられたキューバは、どう生きのびるかが大問題となった。まず一番はエネルギー問題。それまでソ連相手に砂糖を国際価格の3倍で売り、原油を3分の1の価格で輸入していた。その差額が援助でもあり、キューバはさらに余剰原油を転売して外貨を稼いでいた。

ソ連崩壊以降、支払いは現金決済となり、世界中の政治



評論家は声をそろえて、キューバはあと半年で潰れると予言した。エネルギー不足が進む中、中国から大量の人民自転車を輸入し、「ガソリンはいらぬし、健康にも良いし、公害も無い」とフィデルは演説。1つのエンジンで大人数を運べるラクダバスの導入も、サバイバル戦略のひとつだった。

「世界中の富を積み上げても、キューバ人のプライドは買えない」という諺を持つ彼らは、「日本人はアメリカ相手によく戦ったが、結局は負けた。我々は闘い続けて、まだ負けてはいない」と胸を張る。この困難期には、食糧のやりくりも大変だった。この頃から有機農法が広まった。配給が滞りどこでも行列で、ハバナ沖にタイヤチューブで出漁し、獲った魚を外国人に売る者などもいた。

94年8月の暴動以降、32万人が亡命

94年8月にはついに暴動騒ぎになった。マレコン沿いのホテルへの投石が相次ぎ、ハバナの港では群集と警官隊が衝突した。その現場に居合わせたのが、フィデルが2時間後には現場を視察、不満分子は姿を消し反政府活動は消滅した。アメリカ諜報機関の指導を受けていたのだ。騒動の直接的原因は閉塞感だ。1日20時間も停電し、工場も止まってやることも無い。この夏はとくに暑く、何かひと押しで火がつく状況にあった。

フィデルは「いやなやつは出て行け」と演説。お咎めなしだ。ありとあらゆる素材で筏を作り、フロリダ目指して出航する。泳いで筏を沖まで押す商売さえ出現した。結局、合計32万人が逃げ出した。以前に出て行ったマリエル港難民は12万人。国内には苦しいけれど頑張ろうという人のみが残った。

ハバナでは崩壊する街の美しさ、静けさをずっと撮影してきた。生命がやせ細っていくような切なさに惹かれる。

外貨稼ぎで、国は観光業に力を入れ始める。ソ連と東欧の崩壊、天安門事件の中で、改革開放経済が延命策とみられていた。世界一美しい海岸バラデロには、外国との合資ホテルが建ち並び、観光客が押し寄せた。

97年、チェの遺体が還ってきたとき、革命記念塔の中に遺骸が安置されると、革命広場は1週間以上別れを告げる民衆で埋まった。その後、サンタ・クララに運ばれる沿道にも、ずらりと人が溢れた。フィデルの追悼演説には、世



市民生活に携帯が普及



キューバ名物、クラシックカー

中どこでも普通に見かける看板が無いだけで、他の国とまるで街が違って見える。ホームレスやストリートチルドレンを見ることが無いのも救いだ。

去年までと決定的に違うのは、スマホやタブレット、パソコンと、どんどんネット社会に移行している点だ。現在、海外からの送金が無制限になったが、受け取れるのは限られた層だ。黒人層は

やはり少ない。「混血の天国」が自慢の国で、肌の色による格差が新しい問題として出てきている。

医療関係者と医療の現実として、お金がないという話も出ている。観光客のチップで稼ぐ人が、医者より収入が多い。学校も変わってきた。月 80CUC 払っても、チャンスをつかみたいと、英語の家庭教師を頼む。

有機農業も行き詰まってきた。配給所で横流しをする者も多い。インテリで年金暮らしが一番ワリを食う。しかし、革命の恩恵を受けた世代がしっかりしているし、親がちゃんとしている家庭では次世代が頑張っている。

国連総会では、アメリカとイスラエルを除くすべての国々が、対キューバ経済封鎖非難決議に賛成している。経済封鎖をやめられると、経済的に苦しいのはそのせいだといえなくなるので、さらに舵取りが難しくなる。あの崩壊した街並がいつまで持つか。スターバックスやマクドナルドが進出して、あっという間に変わってしまうかも知れない。変わる前のキューバを見たいと、今夏、観光客は 30 パーセント増えた。

民営化を進め、経済改革を行い、あのキューバが格差社会へなだれ込んでいく。果たしてどんなところにクラッシュするのか、ハードランディングするのかソフトランディング出来るのか。「キューバの呪い」というが、私は最後まで見届けたい。キューバ人がキューバ人らしくあってほしいというのが、まさに「キューバの呪い」で、キューバが愛しいという話だが。

外国人観光客が増加する中、情報はとどめようがない。



他の国を知る機会が増大し、キューバが自分自身の立ち位置を知り、方向選択してあくまでもキューバ人がキューバの未来を決める。そのようなキューバをできるだけサポートすることが、我々の未来に繋がるだろう。

講演要約文責
井ノ上節子

界中の代表団が参列した。今、霊廟内にカメラは持ち込み禁止なので、霊廟内部の写真は貴重だろう。

キューバ経済の大変革と倍増した観光客

2003、4 年頃からは、中国の存在が次第に大きくなった。中国系移民は、日系移民よりはるか前から。アメリカ大陸横断鉄道の労働者として入り、さらにパナマ運河建設。終わって仕事がなくなるとサトウキビ刈り労働者としてキューバへ入った。

キューバ経済の大変革は、ドル解禁から。キューバ人がドルを持てるようになり、93 年～2003 年ごろは、ドルがそのまま使えた。1950 年代からタンス預金でしまわれていたドル札さえ出てきた。今は CUC (兌換ペソ) との二重通貨制だ。

「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」の大ヒットで、キューバに対するイメージが圧倒的に変わった。観光客は倍増し、1995 年の 34 万人から 100 万人単位へと変わっていった。

私はカーニバル評論家でもあるが、サンチャゴのカーニバルもただの祭りではない。予算不足で、カーニバル自体はしょぼいが、そのリズムと身体能力には凄まじいものがある。

アメ車のクラシックカーは、以前はパーツをヤスリで削ってやりくりしていたが、燃費が悪すぎ。2005 年以降、中身がヒュンダイや日本製になってきた。

アメリカと国交回復 — キューバの未来は?

2008 年 7 月 26 日、国家評議会議長としてラウルがデビューした。人気面でイマイチなのは、キャラの問題というよりフィデルがあまりに偉大すぎるということ。フィデルは 638 回暗殺計画をくぐり抜け、ギネスブックに公式に掲載されている。ラウルはあと 3 年で引退。後継ぎも決まっており、政権移譲はスムーズに進行するだろう。

この年、カナダでアメリカとの国交回復の話が出て、パチカンが間に入った。アメリカとしても、キューバと別な形に関係を切り替えたほうが得ということ。

ハバナの街は、どこにレンズを向けても絵になる。世界